順天堂グローバル教養論集　第八巻（2023）57–69 頁

調査・実践報告

「グローバル市民のための英語」を振り返る
－学生フィードバック調査によるニーズ・実態の把握から－

今井　純子 [1)*]

【要　旨】

「グローバル市民のための英語」（English for Global Citizenship）は、地球規模課題を内容として学び、協働学習や発信型課題への取り組みを通してグローバル英語を運用し内容言語統合型学習を進める国際教養学部独自の 2 年次必修英語科目である。本報告では、学習者ニーズと科目運営の実態の把握を目的として、2021 年度末に同科目の履修生を対象に実施したフィードバック調査の結果を報告する。科目開講から 6 年目を迎えた 2021 年度は、学位プログラムの質保証のためのモニタリング調査を兼ね、全 53 項目の質問紙調査をオンラインで実施した。調査の結果、内容学習、オリジナル教材、協働学習など、学生の満足度が高かったが、スピーキングスキルの向上や課題の量などについては懸案事項として挙がった。調査結果に現れた学習者ニーズや実態を踏まえ、本報告では 2022 年度の教育改善（学習到達目標の整理、評価ルーブリックの作成、教材・授業運営の調整など）も一部紹介する。その上で、今後予定されているカリキュラム改訂において、本科目が目指す方向性を検討する。

キーワード：グローバル英語、内容言語統合型学習（CLIL）、学習者のニーズ、カリキュラム開発、教育改善

Practical Research Reports

English for Global Citizenship:
Program Development Through Analysis of Student Feedback

Junko IMAI[1)*]

【Abstract】

English for Global Citizenship is a required university-level English course at a faculty of international liberal arts that adopts content-language integrated learning in which sophomores learn global issues through collaborative learning and output-focus assignments using English as a global language. This paper reports findings from a year-end feedback questionnaire with students in 2021, which was administered to understand learner needs and situations. The data was collected also as part of a monitoring inquiry to ensure the quality of the department’s degree program in the course’s sixth year since its start in 2016. While the learners highly satisfied with content learning, in-house module materials, and collaborative learning within the course, some efforts were required to develop speaking skills and to adjust assignment volumes. The paper will report some of the educational improvements (e.g., reviewing student learning outcomes, creating evaluation rubric, updating materials, and adjusting task management) made based upon the study findings. The paper concludes by discussing how the course could further develop as a course as part of an upcoming curriculum reform.

Key words: Global English, Content-Language Integrated Learning (CLIL), Learner Needs, Curriculum Design, Program Development

[1)] 順天堂大学・国際教養学部（Email: j-imai@juntendo.ac.jp）
[*] 責任者名：今井 純子
〔2022 年 9 月 21 日原稿受付〕〔2022 年 12 月 16 日掲載決定〕

緒言（背景と目的）

順天堂大学国際教養学部の 2 年次必修英語科目 English for Global Citizenship（EGC）では、カリキュラムポリシー（順天堂大学国際教養学部「3 つのポリシー」）に基づき、2016 年より、「複言語主義と言語文化アプローチに基づく国際英語科目」を展開している。複言語主義では、英語、日本語、外国語（フランス語、スペイン語、中国語）を対等に扱い、様々なレベルでの言語使用の多様性を肯定的に捉え、ネイティブスピーカーを基準とするのではなく、複数の言語を駆使して個人として何ができるのか（パフォーマンス）を重視する。言語文化アプローチ（e.g., Shaules, 2016）では、文法・スキルなど言語材料の習得を通じて、学習言語が使用される文脈に根付く文化に出会い、気づき、自文化と相対し、多様な文化に寛容的になる、といった複眼的視点の確立を目指す。本科目では、学習言語である英語を、検定試験等で数値化される国際基準としてだけでなく、「グローバル語」として位置付け、少人数クラスでの協働学習を通して、自他の言語使用やグローバルな場面での文化の多様性について気づきを促し、様々な社会問題について、個人やコミュニティーとして何ができるのかを考えさせる授業の仕組みを心がけている。

本科目の背景については、学部開設時の英語教育カリキュラムの理論体系とその変遷、科目としての発展については、本誌前号（今井, 2021）で概説した。開講から 7 年目にあたる現在も、本科目では、地球規模課題を内容として学び、ペア・グループでのコミュニカティブ・タスク、エッセイ、プレゼンテーション等の発信型課題への取り組みで学習言語である英語を運用する内容言語統合型学習（Content Language Integrated Learning; CLIL）（e.g., Coyle, Hood, & Marsh, 2010）を継続している。引き続き、科目としての発展を目指し、本報告書では、最新の学生フィードバック調査と調査結果を踏まえた上での 2022 年度の教育改善を一部紹介する。その上で、今後予定されているカリキュラム改訂において、本科目が目指す方向性を検討する。

1. 調査概要

本科目では、履修学生を対象として 2016 年から 2018 年に独自の科目評価としての学期末アンケート行ってきた（今井、2021）。2021 年度については、国際教養学部学位プログラムの質保証の取り組みとしてカリキュラム評価委員会に要請されたモニタリング調査を兼ねて学年末にアンケートを実施した。調査対象となる科目の統計は図 1 の通りである。2021 年度は、通年通り、1 年次必修英語科目（International Interactive English）の履修を前年度までに終えた主に 2 年生 240 名前後を対象に、各クラス 12 名前後の計 20 クラスを、11 名の教員で分担し、週 4 回ずつ授業を行なった。授業回数は前期 57 回、後期 58 回、各学期 1100 コマ以上を稼働させるという大規模カリキュラムであるが、出席率は前後期を通して 90% を超え良好であった。また、前期は全 246 名中 242 名（97.4%）、後期は 244 名中 234 名（95.9%）が無事単位を取得し、前後期を通じて単位不認定者は全体の 5% 未満であった。

表 1. EGC 科目統計データ（2021 年度）

	前期（EGC1）	後期（EGC2）
単位数	4 単位	4 単位
履修学生数	246 名	244 名
クラス数	20 クラス	20 クラス
教員数	11 名（専任 2、教育講師 9；日本人 5、ネイティブ 6）	
授業回数	57 回	58 回
総稼働コマ数	1140 コマ	1160 コマ
出席率（平均）	94.0%	90.0%
欠席回数（平均）	2.6 回	4.8 回
遅刻回数（平均）	2 回	3 回
単位認定者数	242 名（97.4%）	234 名（95.9%）
単位不認定者数	4 名（1.6%）	10 名（4.1%）

調査では、オンライン形式（グーグルフォー

ムを使用）の質問紙を配布し、項目数は、選択式が 50 項目、自由記述式が 2 項目の計 52 項目であった[1)]。選択式の項目は、科目についての各項目について、自分の意見や評価を 4 つのスケール（強くそう思う；そう思う；あまりそう思わない；全くそう思わない）から選択する形式であった。その中の 30 項目は、後日経年比較を可能とするため 2018 年までの質問と同一とした。オンラインフォームへの回答は、2021 年度の後期授業最終日にあたる 2022 年 1 月 20 日（木）の 1､2 限の時間帯から 1 月 23 日（日）23 時 59 分まで可能とし、回答数は履修者 241 名中 218 名（回収率 90.5%）で、学年を通しての全体の出席率とほぼ同率であった。

2. 調査結果

2.1. 内容言語統合型学習（CLIL）について

本科目における､内容言語統合型学習（CLIL）は､内容と言語の学習を統合することによって、学習者のモチベーションを維持・向上し、3、4 年生での領域学習やよりアカデミックな英語使用に備えることを狙いとしている。2021 年度の内容学習は、持続可能性（Sustainability）を基軸として、前期は、観光、和食、ジェンダーの観点から「日本におけるグローバル化と多様性」、後期は、気候変動、貧困、紛争と平和の観点から「世界におけるグローバル課題と多様性」というテーマで実施した。言語面では、授業内でディスカッションやディベートなど、様々なコミュニカティブ・タスクを行い、単元のまとめとして､毎月､エッセイとプレゼンテーションといった発信型タスクに取り組んだ。また、「地球規模の課題解決のため、グローバル市民としてできることが何か」を通年のテーマとし、個別の興味・関心に沿ったニュース記事を読み、学年末にはアクション・プランをポスター形式で発表した。

調査の結果、内容学習について、図 1 に示すように、ほとんどの学生が国内外におけるグローバル化や地球規模の課題への理解が深まったと回答した（Q.2）。また､履修者の 8 割超が、本科目が 1 年次英語科目での体験とは異なっており（Q.49）、3 領域概論・展開科目・ゼミナール・進路と結びつくと回答した（Q.50）。6 つの単元テーマについては、95% を超える学生がその意義を認めた（Q.11, Q12）が、残り 5% の学生については、内容理解と興味・関心を探求する学習機会提供に不足を感じていたようであった（Q.22）。自由記述式の欄では、「世界的な問題に積極的に目を向け、考える力が養われた」といったコメントが多く見られたが、「赤十字などの国際的医療現場についても学べる機会があると、当該科目はヘルス領域とも結びつきが強くなる」といった医療系テーマのニーズも散見された。

言語面については、8 割超が、リスニング、リーディング、ライティングの伸びを実感しており（Q.24）、9 割超の学生が､プレゼンテーション能力（Q.23）とコンピュータースキル（Q.10）も向上したと回答した。その一方で、スピーキング能力が向上したと感じる学生は 7 割程度に留まり、3 割程はスピーキングに苦手意識を持っているようであった（Q.3）。自由記述式の欄には、「英語という言語や module で得た知識など、情報をインプットするだけでなく、プレゼンやライティングなどでアウトプットする機会が豊富だった」という好意的なコメントが目立ったが、「クラス全体で先生も交えて英語で議論、討論をする機会があると良かった」というように、英語で話す時間や教員とのフリートークを望む声も見られた。

心理面では、科目の難易度について 6 割が「ちょうどよい」と回答し（Q.21）、7 割超がモチベーションを維持し英語に自信を持ったと回答したが、残り 25% はモチベーション維持が難しく、英語に自信が持てなかった様子である（Q.8, Q.9）。自由記述式の欄には、「英語以外の事を同時に学べるという事も、英語の学習のモチベーションを維持する事に繋がっていた」という本科目のねらいに合致した発言も見られた

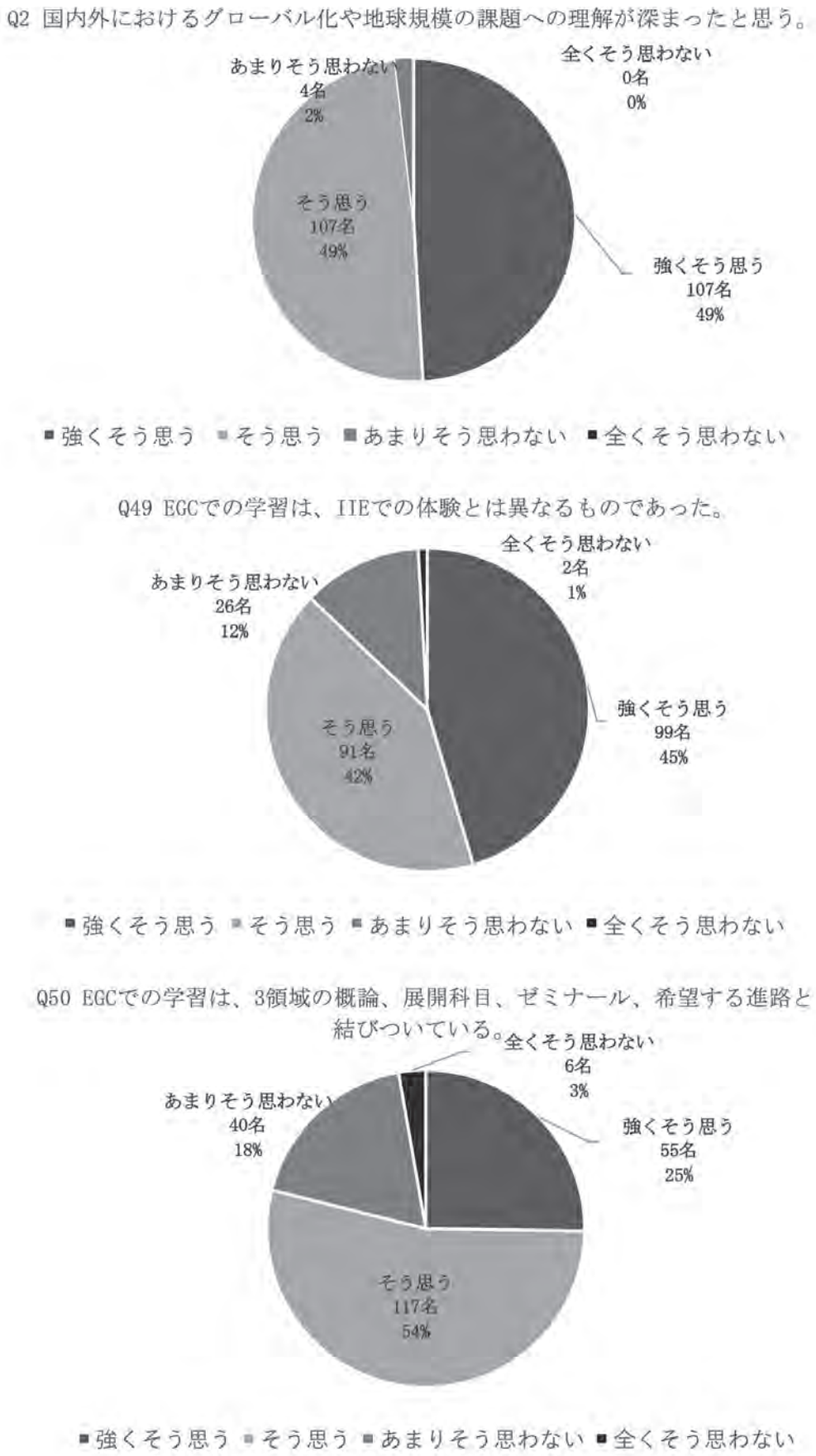

図 1. フィードバック調査における内容学習についての回答

が、「自分の実力を伸ばすのに適したクラスに割り振られないと、一年を通して肉体的、精神的に非常に負担が大きい」と、クラス編成と難易度の調整について課題が指摘された。また、コロナ禍におけるオンライン環境でのコミュニケーションの制限などの影響を挙げたコメントも多く見られた。

2.2. 共通カリキュラムでのモジュール学習について

本科目は、教育の質の保証の観点から、20クラスが同じシラバスとテンポで学びを進める共通カリキュラムを採用している。教材については、最新の社会情勢や多様な視点を折込み、毎年、担当教員が学期前にグループで打ち合わせを重ね、オリジナル冊子（図 2）を作成する。オリジナル冊子では、テーマへの導入ディスカッションから、コアとなるオーセンティックなニュース記事・映像の理解を深める様々なコミュニカティブ・タスクを盛り込み、各クラスのニーズや理解度に応じて補足のアクティビティーを行い、月末のエッセイやプレゼンテーション課題への取り組みに繋げていく、モジュール学習方式を採用している。その他、多読（X-Reading）、流暢な書き手を育てるフリーライティング（Quick Writing）、オンライン学習システム（Quizlet）を使った英単語学習プログラム、ポスター発表に向けて興味関心を探求しニュース記事を記録する Issue Log 等、全クラス合同の基準を設けている。通常の各クラスでの授業に並び、本科目では、20 クラスが合同で交流するイベント（前後期オリエンテーション、TOEFL 模擬テスト、ポスター発表会、外部講師や担当教員のレクチャー等）を、2021 年度は計 8 回実施した。特に、1 期生から続くポスター発表会は、1 年生や他科目教員も聴衆として迎えるオープンハウス形式で行なっているが、6 度目となった 2021 年度は、前年度に続いてコロナ禍によるオンラインでのライブ開催となった（図 3）。

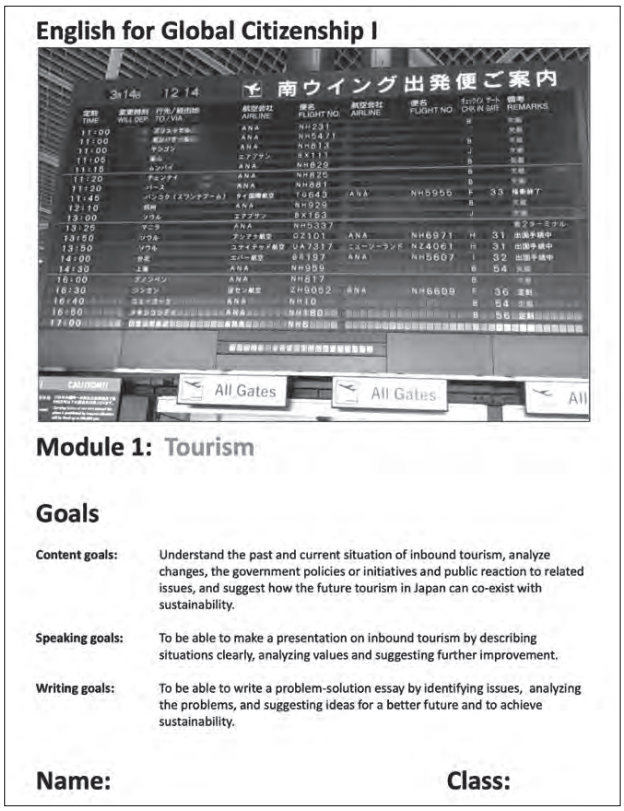

図 2. オリジナル教材（Module Booklet）の例

調査の結果、回答者の 9 割が、各月配布されるオリジナル教材と、1 ヶ月を想定したモジュール学習プロセスを、高く評価していることがわかった（Q.13, Q.14, Q.15）。その一方で、7 割以上の学生が全体を通して、課題が多いと感じていることが判明した（Q.43）。自由記述式の欄では、「沢山の Module をこなすことには大いに賛成であるがその一つ一つへの理解が深まっていない状態で各 Module のプレゼンやライティングに進んでしまうことに対してはせっかくの学習が浅いものになってしまうため、一つ一つの Module にもう少し時間を費やしてほしい」といった意見もあり、授業内でモジュール教材を使いこなせなかった学生も見られたようである。

授業開始時に実施した多読とフリーライティングについては、6 ～ 7 割が、英単語学習については 8 割が肯定的に回答した（Q.17, Q.18, Q.41）。一方で、どのタスクについても、約 3 割の学生が後ろ向きに回答した。特に、英単語学

図 3. ポスター発表会（オンライン開催）の例

習プログラム（Quizlet）の定期的な利用は 4 割に留まり（Q.41, Q.42）、Issue Logs について約 3 割が改善を望んでいた（Q.16）。自由記述式項目への回答の多くは、「個人的には X-reading の利用が不便に思いました。その多くの原因がサイトの作りにあって、多読に対しては賛成の意見です」、「vocabulary の課題がただの作業になってしまい、テストはあるものの、あまり効果を得られる方法ではない」、「プレゼンの準備をその他の科目の課題､授業内での普通の課題、issue log と並行するのはなかなか厳しいものがありました」等、システムの運用や課題提出時期に関するものであった。

合同クラスやイベントについて８割超が有意義と回答し、特に、ポスター大会への満足度が非常に高く 85% の学生が満足していた（Q.46, Q47, Q48）。自由記述式の欄では、

> 「今後も維持してもらいたい点は、Poster Showcase です。私は興味のあった分野について細かく調べ発表しました。関心があっても全く知らなかった情報はたくさんあったため、大変興味深く、楽しく学ぶことができました」
>
> 「他のグループの方との交流の機会がもう少しあっても良いと思います。全体で行ったプレゼンくらいしか機会がなく、視野がどうしても自分達だけのレベルになってしまいます。今回もテーマに偏りがあり、他のグループの人たちの全く違った視点を聞くことができたのはよかったですが、普段からもう少し他の人たちの雰囲気を捉えることができたら、視点も広がり、意見の幅が広がったり、刺激になったりすると思います」

といったコメントが複数見られ、全体的に（複数）クラスでの合同イベントが肯定的に捉えられていることが示唆された。

2. 3. 協働学習と自律学習支援について

グローバル社会で必要とされるライフスキルは、(a) 仲間と協力して目標を達成や問題解決する能力と、(b) 目的意識を明確に持ち、自律

的に学び目標を達成する能力である。これらのライフスキルと関連して、本科目では、少人数でクラスを編成し、クラスルームタスクや課題取り組みのあらゆる場面に、ペアやグループワークといった協働学習やアクティブ・ラーニングを取り入れている。その一方で、個人の興味関心に基づくプロジェクト学習を目指したIssue Logやポスター制作、英語検定試験対策については、(a) 授業時間や学期に2回のカウンセリングを通しての教員による導入と (b) 授業外での自律学習、とを組み合わせて実施している。国際標準の能力測定基準として全学的に取り組んでいるTOEFL対策は、問題集を自宅で取り組むだけでなく、授業内で適宜確認テストを行い、ディスカッション活動を行っている。また、モジュール毎のテーマに合わせ、リーディングの過去問を紹介し、リスニング問題を独自に作成して使用するなどの工夫をしている。本科目では、2年次のTOEFLスコアの平均を確実に伸ばしており、2021年度の平均は480に近似する477点であった。

調査の結果、本科目での協働学習やアクティブラーニングについて、95%超の履修者が評価しており（Q.25, Q.29, Q.28, Q.30)、授業内外でのTOEFL試験対策や問題集の選書、模擬テストの実施について8割超の学生が好意的であった（Q.33, Q.34, Q.35, Q.36)。教材作成や科目運営における担当教員の協働についても、広く認識されており、教員との距離の近さ、指導の熱心さ、タスク管理の徹底など、学生の支援体制の充実についても学生からの評価も高かった（Q.26, Q.27,Q.31, Q.32)。自由記述式の欄においても、「英語の問題を解くような受け身の授業だけでなく、能動的な活動が多い」、「分からないことを分からないと言いやすい場でもある」、「クラスの全員と関わることができたり内容を確認し合ったり意見を交換できたりした」といった前向きな意見が多く見られた。一方で、英語を使っての協働学習は約1割の学生にとっては、難しいタスクであった様子である(Q.30)。自律学習についても、大多数が宿題・課題、TOEFL対策に一生懸命取り組んだ一方で、4割の学生は自身のTOEFLスコアに満足しておらず、3年次以降も受験を検討していた（Q.20, Q.37, Q.38, Q.39, Q.44)。また、「TOEFL対策を主にやりたい人と地球規模の問題を主に学びたい人とでクラスを分けたほうが良い」といったコメントも見られる等、内容学習または英語試験対策と、学生ニーズも多様であることが示唆された。

3. 2022年度の科目運営状況

フィードバック調査の結果を受けて、年度末に担当教員で議論を重ねる機会を持ち、次年度の実施計画にあたった。まず、開講学年の2年次は、1年次での基礎の学びを活かしながら、前期に3領域概論を履修し、後期に領域選択をする時期であることから、本科目をカリキュラムポリシーにおける「導入期」から「形成期」への橋渡しとなる学びを提供する場と位置付けた。また、本学部のディプロマポリシー（順天堂大学国際教養学部「3つのポリシー」）で示される4つの指針の網羅や本学部が学習成果の包括的評価のために独自に使用するコンピテンスの項目群での英語でのコミュニケーション能力の3つのレベルのコンピテンシーを確認した。その上で、1年英語科目での既習事項や学び残しも踏まえ、前年度まで個々の単元・モジュール冊子にて設定していた内容・言語の学習目標の設定を、学期毎や年間の学習プロセスとして調整を試みた。また、課題や学習の消化不良を防ぐため、前年度まで毎月課していたエッセイとプレゼンテーションを1つに絞るなど、目的を持った課題の設定を心がけ、表2のようなルーブリックを、前期、後期、及び主な課題についてそれぞれ作成した。

表2は、2022度前期の内容・言語（スピーキング、ライティング）の到達目標と課題を要約したものである。2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻や2020年から続く世界的な

表 2. EGC における学習到達目標と課題（2022 年前期）

Module	Content Goals	Speaking Goals	Writing Goals	Assignment
Peace & Conflict (April)	Students will understand the background of current and past conflicts and measures taken by countries to help people in difficult situations. They will also gain a wider, deeper perspective on causes of displacement and possible remediation (aftermath of conflicts), and explain how to maintain peace for a ***sustainable*** future.	Students will introduce one current conflict, explain its ***cause and effect***, introduce measures and initiatives taken, and share their opinion to the issue with logical reasonings through group presentations.	Students will review basics of ***sentence and paragraph organization***, how to write the introduction in particular, through writing-focused activities.	Group Presentation (Informative)
Gender Inequality (May)	Students will understand key issues in gender inequality, particularly in work life, considering Japan in context and from an international perspective and the effect of gender inequality on the society. They will also identify strategies to achieve a ***sustainable*** society with a better gender balance.	Students will ***compare and contrast*** gender issues in various contexts, by gather information and reflecting on their own experience through speaking-focused activities.	Students, in an ***opinion essay***, identify one specific issue to make a statement about their position, explore their position with reasonable support and logical reasoning, and make realistic suggestions.	5-Paragraph Essay (Opinion, Argument)
Poverty (June)	Students will understand various types of poverty and increase awareness that poverty is also relevant to their everyday life and the current situation in Japan. They will also learn that poverty is the core problem that is related to all other global issues and propose ideas to realize the situations ***sustainable*** for various individuals.	Students will identify ***problems*** by describing cause and effect and propose ***solutions*** in individual presentations.	Students will further understand ***academic voice*** through writing-focused activities (e.g., writing the conclusion).	Individual Presentation (Analytical, Exploratory)
Collaboration Week (July)	Students will review global issues covered in this semester and identify one specific imminent global issue in a community they are part of. In order to achieve the ***sustainable*** society, they explore strategies to solve the problem, and as a group, make a petition to a world leader and/or wider international community calling for aid.	Students will ***discuss*** local and global issues that need attentions from the international community, ***debate*** on an effective solution, and argue their points orally in their process of writing together.	Students will write a ***petition letter*** in collaboration with their group members and explore different ***rhetorical genres*** of writing in a real-life task.	Group Writing of a Petition Letter

コロナ蔓延という社会情勢を踏まえ、内容学習の単元の順番や教材の調整をし、前期は「現代の世界問題を自己や日本と関連づける」をテーマとして、平和と戦争（4 月）、ジェンダーの不平等（5 月）、貧困（6 月）のモジュール学習を行い、世界から日本へ学生の視線を向けることを狙いとした。地球規模の課題を「自分ごと」として落とし込む難しさは、前号（今井, 2021）にも挙げたが、2022 年度においては、自己の文化、生まれ育った地域の歴史、日常生活や体験を振り返り問題意識を持つタスクを教材に差し込むこととした。前年度と同じく持続可能性（Sustainability）を基軸としながらも、戦争、女性差別、貧困が、遠い外国のことでなく、日本にも関連し深刻であることを気づかせるタスクを追加した。スピーキングについては、原因と結果、比較、問題解決といった様々な修辞パターンをディスカッションやプレゼンテー

表 2（続き）. EGC における学習到達目標と課題（2022 年後期）

Module	Content Goals	Speaking Goals	Writing Goals	Assignment
Climate Change (October)	Students will understand the relationship between climate change and our way of living and the impact of globalization to the earth and human-beings. They will gain the knowledge to argue whether it's better to adapt to or mitigate climate change and discuss how to do it for ***sustainable*** living and a future.	Students will analyze causes and effects, support one of the positions/ solutions with sufficient evidence and reasoning and understand controversial issues deeply by comparing opposing perspectives in ***debate***.	Students will write a ***summary*** of an article in an academic tone, by grasping main ideas and differentiating various people's opinions on a particular issue. They will also write scripts for debate.	Policy Debate
Culinary Traditions & Wellness (November)	Students will understand and explain the uniqueness of Washoku from traditional/cultural and science/ nutritional perspectives and analyze its influence of globalization. They will also explore how to maintain, develop and promote Washoku culture and how (the spirit of) Washoku can contribute to ***sustainable*** eating.	Students will understand diverse aspects of one controversial issue by describing situations, proposing solutions, analyzing values of different ideas, and suggest further improvements in ***discussions***.	Students will ***compare and contrast*** ideas of different articles and back up their own opinion with evidence and background research on a particular issue.	Group/Panel Discussion
Inbound Tourism (December)	Students will understand the past and current situation of tourism and analyze changes, the government policies or initiatives, public reaction to related issues, and the impact of globalization to tourism, economy and environment. They will also suggest how the future tourism in Japan can co-exist with ***sustainability***.	Students will further ***practice*** describing problems, explaining sequence of events and change using data, and their opinions or prospects clearly to the audience.	Students will identify a ***problem and solutions or suggestions*** by ***synthesizing*** different articles on a particular issue.	Reference Summaries (Annotated Bibliography)
Poster Showcase (January)	Students will identify one specific global issue to solve, explain its cause and effect by showing evidence and data, and propose solutions in relations to globalization and ***sustainable*** development goals. They will report action plans for themselves as global citizen, the audience and the university community.	Students will ***present a poster*** by describing the situation and problem effectively, describing possible solutions, and sharing their action plan clearly to the audience.	Students will create a poster as an ***effective visual tool*** summarizing ideas, making points, and expressing their originality.	Poster Presentation (Action Plan)

ションに盛り込めるよう目標設定を行なった。ライティングについては、基礎となる 5 段落構成のエッセイの各要素を単元毎に復習すると共に、学期末には、ビジネスレター形式の嘆願書というジャンルについても扱い、夏休みを通じて、新たな形でのエッセイコンテストを実施した。後期は転じて、日本から世界へと視点が向くよう、「日常におけるグローバル化の影響を理解し、世界への貢献方法を明らかにする」をテーマとして、気候変動、和食、観光についての内容学習を行い、学生からのニーズに応え、何れか、または全てのモジュールにヘルス領域の話題を提供する予定である。

学習到達目標の設定や教材開発というハードな面と並行して、2022 年度は、クラス・アクティビティーの運用方法、モジュール学習の捉え方、といったソフトな面においても教育改善を試みている。まず、モジュール学習のあり方や各タスク（特に Quizlet、Issue Log）の運用方法について、担当教員間での理解や認識を統一し、

履修者の意識づけが必要と思われる。本科目のモジュール学習は、クラスや学生個人の習熟度に応じて、内容の追加や省略が可能であり、授業に扱わなかった分については、自主的な学習での活用など、その捉え方の意識づけが必要と思われる。次に、スピーキングスキルの向上について他のスキルと同等の満足度を得ることができるよう、コロナによる行動制限が緩和し、対面授業が可能となった2022年度は、双方向型インタラクションやフリートークを交えたタスクを増やしている。また、フィードバック調査では、履修者の多くが、前年度8回行なった10クラス毎の合同クラス以外にも学習交流の機会を求めていた傾向が見られたので、いくつかのクラス対抗のディベートを行うなど、新たな協働学習の形を検討したい。この他、夏休みの課題としては、前期の復習やエッセイコンテストの参加、後期の多読やTOEFL e-Learningと連動して評価できるよう工夫を試みた。今後、自律的な学習を促すため、自主学習教材や洋書・書籍の紹介なども行う予定である。

結論

国際教養学部では、2023年にカリキュラム改訂が予定されており、改訂の狙いは、目的意識を明確に持ち、自律的に学び世界に活躍できる「グローバル市民」の育成である。2年次英語科目（EGC）は、学部設立当初の国際英語カリキュラムのコアとなった複言語主義の考え方や言語文化アプローチを踏襲しつつ、内容言語統合型学習（CLIL）、モジュール教材、SDGsを取り入れながら、履修学生と担当教員の協働を強みとして発展を遂げてきた（詳細は今井、2021を参照）。本科目を通して、本学部2年生は、グローバル英語を運用し、日本や世界が直面する課題についてペア・グループでの学習を通して共通理解を深め、プロジェクト学習を通して、個人やコミュニティーとして問題解決に向けて何ができるか考え、エッセイ、プレゼンテーション、ポスター等で持続可能なアクションプランを発信している。

これまでの取り組みを発展させる形で、新カリキュラムが目指す「自律したグローバル市民の育成」に寄与するため、まずは、本科目について学部内での理解促進に努めたい。具体的には、内容学習で扱うテーマの情報共有を通して、グローバル社会・異文化コミュニケーション領域との既存の繋がりを深め、履修生のニーズが高いグローバルヘルスサービス領域に関するテーマや、卒業後のキャリアビジョンにも繋がる活動を盛り込むことで、本学部独自の国際英語科目の提供が可能となるのではないかと考えている。

本科目は、これまで学生を対象としたフィードバック調査を定期的に実施し、学生からの評価やニーズを踏まえて次年度の科目運営をするなど、学生による主観的評価を中心に英語教育プログラムの教育効果を検証し改善の取り組みへと結びつけてきた。学生（卒業生）と教員が共に科目を創るという要素を保ちつつ、今後は、客観的な指標も積極的に取り入れ、授業・学習効果の検証に役立てていきたい。客観的な指標の一つとして、英語試験のスコアと共に2022年度新たに運用しているのが、全モジュールを通しての学習目標（表2）やそれぞれの課題のための評価ルーブリックであるが、今年度の試験的使用を通して、今後も教育改善を試みたい。また、将来、ポスター発表会等の学期末イベントを、学生主体の運営とし、教員がサポートした上で広く聴衆を募ったり、夏季・春季にEGCでの学びを連動させた海外研修を実施できれば、学生の自律促進に繋がるのではないかと思われる。本学部が独自に設定するコンピテンシーの項目群では、本科目EGCは外国語（英語）を用いたコミュニケーション力のレベル2「グローバル市民として、SDGsなどのグローバル化した社会における課題や求められる行動について、英語を用いて提案を行い、意見を発表することができる」にあたるが、これだけにとどまらず、ディプロマポリシーが掲げる4つ

の能力をも醸成できるよう、教員・学生が手を携え、「グローバル市民のための英語」科目の教育改善に励みたい。

謝辞

本稿は、2 年次英語科目（EGC）における 2021 年度フィードバック調査の実施と担当教員の話し合いを元とした 2022 年度実施計画をまとめたものであり、本科目の運営に関わる全ての EGC 担当教員のご協力に感謝申し上げます。

註

1） フィードバック調査において選択式（[強くそう思う；そう思う；あまりそう思わない；全くそう思わない]）で回答を求めた 47 項目については、付録を参照のこと。変則的な尺度で回答を求めた Q21 と Q43、自由記述式の Q51,52 については誌面の都合上割愛するが、著者への問い合わせも可能とする。

引用文献

Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

今井純子（2021）.「『グローバル市民のための英語』を振り返る−カリキュラムの黎明・創成から発展を目指して」『順天堂グローバル教養論集』第 6 巻，117-126.

順天堂大学国際教養学部「3 つのポリシー」2022 年 9 月 15 日 情報取得 : https://www.juntendo.ac.jp/ila/department/Policy.html

Shaules, J. (2016). The development of model of linguaculture learning: An integrated approach to language and culture pedagogy. *Juntendo Journal of Global Studies*, 1, 2-17.

付録

表 3. フィードバック調査選択式項目の回答結果

	1	2	3	4
Q2 国内外におけるグローバル化や地球規模の課題への理解が深まったと思う。	**107** **49.1%**	**107** **49.1%**	4 1.0%	0 0.0%
Q3 英語でのリスニングの能力が向上したと思う。	58 26.6%	**129** **59.2%**	30 13.8%	1 0.5%
Q4 英語でのスピーキングの能力が向上したと思う。	40 18.3%	**111** **50.9%**	66 30.3%	1 0.5%
Q5 英語でのリーディングの能力が向上したと思う。	38 17.4%	**135** **61.9%**	43 19.7%	2 0.9%
Q6 英語でのライティングの能力が向上したと思う。	47 21.6%	**133** **61.0%**	36 16.5%	2 0.9%
Q7 英語でのプレゼンテーションの能力が向上したと思う。	101 46.3%	**102** **46.8%**	13 6.0%	2 0.9%
Q8 全体的に英語を使うことに自信がついたと思う。	46 21.1%	**115** **52.8%**	52 23.9%	5 2.3%
Q9 英語の学習意欲（モチベーション）を維持することができた。	39 17.9%	**125** **57.3%**	48 22.0%	6 2.8%
Q10 オンライン環境やコンピューターを使って学習する能力が向上した。	**99** **45.4%**	98 45.0%	17 7.8%	4 1.8%
Q11 前期に扱ったテーマ（Tourism, Washoku Gender Equality）は意味のあるものだった。	**116** **53.2%**	95 43.6%	7 3.2%	0 0.0%
Q12 後期に扱ったテーマ（Climate Change, Poverty, Peace & Conflict）は意味のあるものだった。	**133** **61.0%**	76 34.9%	8 3.7%	1 0.5%
Q13 オリジナル教材（Module Booklet や Google Classroom で紹介された記事やアクティビティー）は役に立った。	96 44.0%	**102** **46.8%**	17 7.8%	3 1.4%
Q14 モジュール毎のプレゼンテーションの課題は有意義だった。	65 29.9%	**129** **59.2%**	20 9.2%	4 1.8%
Q15 モジュール毎のライティングの課題は有意義だった。	58 26.6%	**131** **60.1%**	29 13.3%	0 0.0%
Q16 Issue Logs の課題は有意義だった。	54 24.8%	**100** **45.9%**	56 25.7%	8 3.7%
Q17 多読（X-Reading）は役に立った。	41 18.8%	**109** **50.0%**	54 24.8%	14 6.4%
Q18 多読に基づいた Quick Writing は役に立った。	43 19.7%	**126** **57.8%**	42 19.3%	7 3.2%
Q19 英単語学習プログラム（各回の Quiz、Quizlet、Deeper Vocabulary Learning）は役に立った。	61 28.0%	**115** **52.8%**	33 15.1%	9 4.1%
Q20 夏休みの宿題（TOEFL の文法問題演習、X-Reading 等）は効果的だった。	35 16.5%	**109** **50.0%**	61 28.0%	12 5.5%
Q22 グローバル化や地球規模の課題について、内容理解を深め、興味・関心を探求する機会が十分にあった	97 44.5%	**109** **50.0%**	10 4.9%	2 0.9%
Q23 授業中にリスニングやスピーキング、プレゼンテーションを練習する機会が十分にあった。	94 43.1%	**102** **46.8%**	20 9.2%	2 0.9%
Q24 授業中にリーディングやライティングをする機会が十分にあった。	93 42.7%	**108** **49.5%**	16 7.3%	1 0.5%
Q25 ペアワークやグループワークの機会がたくさんあった。	**128** **58.7%**	84 38.5%	6 2.8%	0 0.0%

Q26 うまく構成されており、担当の先生方は熱心に指導してくれた。	**129** **59.2%**	89 40.8%	0 0.0%	0 0.0%
Q27 担当の先生方は授業に協働的な雰囲気を作り出そうとしていた。	**131** **60.1%**	84 38.5%	3 1.4%	0 0.0%
Q28 学生同士で協力し合う雰囲気ができていた。	86 39.4%	**108** **49.5%**	23 10.6%	1 0.5%
Q29 授業内でのアクティビティー（ディスカッション等）に積極的に参加した。	**108** **49.5%**	100 45.9%	9 4.1%	1 0.5%
Q30 ペアワークやグループワークは自分の学習に役に立った。	95 43.6%	**101** **46.3%**	20 9.2%	2 0.9%
Q31 担当の先生方は個人的に手助けやアドバイスをしてくれた。	**127** **58.3%**	82 37.6%	9 4.1%	0 0.0%
Q32 担当の先生方との英語学習カウンセリングは役に立った。	96 44.0%	**102** **46.8%**	19 8.7%	1 0.5%
Q33 TOEFL の試験対策に一生懸命取り組んだ。	30 13.8%	**109** **50.0%**	65 29.8%	14 6.4%
Q34 授業内での TOEFL 対策は十分であった。	58 26.6%	**128** **58.7%**	28 12.8%	4 1.8%
Q35 指定の補助教材（『TOEFL ITP TEST リスニング完全攻略』）は役に立った。	37 17.0%	**143** **65.6%**	35 16.1%	3 1.4%
Q36 TOEFL の模擬試験（Mock Test）はためになった。	50 22.9%	**128** **58.7%**	33 15.1%	7 3.2%
Q37 授業外でも TOEFL に向けて自主的に勉強した。	24 11.0%	**89** **40.8%**	85 39.0%	20 9.2%
Q38 ご自身の最新の TOEFL スコア（1/20 担当教員から返却予定）についてどう思いますか？	17 7.8%	86 39.4%	**96** **44.0%**	19 8.7%
Q39 可能であれば、次年度以降も TOEFL ITP の受験を希望する。	55 25.2%	**93** **42.7%**	51 23.4%	19 8.7%
Q40 宿題、授業の予習・復習、課題に一生懸命取り組んだ。	69 31.7%	**104** **47.7%**	39 17.9%	6 2.8%
Q41 多読（X-Reading）に一生懸命取り組んだ。	60 27.5%	**80** **36.7%**	69 31.7%	9 4.1%
Q42 定期的に Quizlet 等を使って英単語の学習をした。	37 17.0%	63 28.9%	**82** **37.6%**	36 16.5%
Q44 授業の単位取得、TOEFL 対策以外にも、目的を持って、積極的に英語の自主学習に取り組んだ。	41 18.8%	**112** **51.4%**	61 28.0%	4 1.8%
Q45 ご自身の英語学習の目的や興味に沿った教材や書籍を見つけることができた。	28 12.8%	**105** **48.2%**	67 30.7%	18 8.3%
Q46 複数クラスでの合同の授業（各学期のオリエンテーション、Special Lecture Series 等）は役に立った。	40 18.3%	**139** **63.8%**	33 15.1%	6 2.8%
Q47 エッセイコンテスト（10 月）は有意義だった。	35 16.1%	**110** **50.5%**	66 30.3%	7 3.2%
Q48 ポスター発表会（1 月）は有意義だった。	74 33.9%	**114** **52.8%**	23 10.6%	7 3.2%
Q49 EGC での学習は、IIE での体験とは異なるものであっ	**99** **45.4%**	91 41.7%	26 11.9%	2 0.0%
Q50 EGC での学習は、3 領域の概論、展開科目、ゼミナール、希望する進路と結びついている。	55 25.2%	**117** **53.7%**	40 18.3%	6 2.8%

Notes: 回答の選択肢（「1：強くそう思う」;「2：そう思う」;「あまりそう思わない」;「全くそう思わない」）、各項目の最高値は太字表示、全回答者 218 名における回答者の実数（上段）と割合（下段）を報告する。